



「文検図画科」の研究

亀澤, 朋恵

(Degree)

博士 (教育学)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2017-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6164号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006164>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



とが予想される。また、学問学説内容史的な側面から、中等学校の図画の実態解明への貢献が期待できる。

論文内容の要旨

氏名 亀澤 朋恵
専攻 教育・学習
指導教員氏名 船寄 俊雄

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

「文検図画科」の研究

論文要旨

本研究は、戦前期、通称「文検」と呼ばれた文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験の図画科(以下、「文検図画科」)において図画科教員に期待された資質、試験問題に付随する学問内容、受験者たちの学習状況や動態など、制度下で展開された諸相の実態を明らかにすることを目的とする。

戦前期の中等教員養成は高等師範学校などの直接養成だけで担われた訳ではなく、正規の学校系統を経ていない多様な人達によって教育現場が支えられた。中等教員免許状取得ルートは複数存在し、大きく分けると次の三つに分けられる。第1に高等師範学校に代表される直接養成、第2に公立学校における指定学校および許可学校による無試験検定、そして第3に試験検定、即ち「文検」である。

「文検」は今日消えてしまった制度であるが、戦前期における大規模な教員資格認定試験であり、1885(明治18)年から1949(昭和24)年まで、途中中断を挟みながら65年の間実施された。その間、総受験者数は約26万人、合格者は約2万人を輩出した。「文検」は独学によって教員免許状の取得が可能であり、途中から中等教育卒業程度という学歴要件が付されたが、基本的に誰にでも受験の機会が開かれていたため、教育界に及ぼした影響は無視できないといえる。

序章

序章において「文検」の先行研究の検討を行い、本研究の課題を設定した。寺崎昌男・「文検」研究会らは、近代日本の教員資格試験の社会的実態と、この試験制度を通して展開された学問学説内容史的な解明を中心に研究を進めてきた。本研究も寺崎らの視点に沿って検討を進めるものとする。

「文検図画科」に着目した理由は、まず「文検」研究の空白を補うことである。「文検図画科」を含む実技の学科目は、「文検」の中でも研究の蓄積が少ない学科目群である。「文検図画科」は大部分が実技試験であったため、学習実態は筆記試験の学科目のそれとは異なったこ

第1章「文検図画科」の制度

第1章では「文検図画科」の制度について、制度変遷、受験者統計、合格発表の3点から枠組みを検討した。「文検図画科」の制度の特徴は、制度変遷は基本的に「文検」の変遷に沿っていたこと。試験科目が中等教育の図画の枠組みと一致しなかったこと。教育現場から試験制度への働きかけがあり、それが影響を及ぼした可能性があることの三つが挙げられる。

受験者統計を集計した結果、「文検図画科」の総受験者数は約1万人、合格者は約1,000人であった。受験者の特徴は、「日本画(毛筆画)用器画」「西洋画(鉛筆画)用器画」「図画」の三つの受験区分のうち、「西洋画(鉛筆画)用器画」が7割近くを占めたことが明らかになった。無試験検定との比較では、合格者数では無試験検定が上回るが、出願者数では圧倒し「文検」制度を支えた。教員免許状取得ルート別に免許状取得状況を比較すると、量的な教員供給において無試験検定が果たした役割が大きかったことが確認された。特徴が際だったのが「図画」であり、試験の負担が最も大きい「文検」の合格者は極端少なく、カリキュラムに恵まれた直接養成機関の強さが看取された。

合格者は『官報』に受験区分と願書進達地方庁(出願地域)とともに発表された。合格者は東京に偏在したこと、女性が少なかったことの2点の特徴が挙げられる。この原因には学習環境や内容における地域および男女格差が存在したことが背景にあったと考えられる。著名な合格者については、彼らの履歴が判明する限りにおいて、画家と図画教員の師弟関係やネットワークの存在がうかがえた。

第2章「文検図画科」の検定委員

第2章では「文検図画科」の検定委員について整理した。検定委員は試験問題の作成、採点、本試験の試験監督、口述試験を担当した。出題は「日本画(毛筆画)」「西洋画(鉛筆画)」「用器画」は各科目一人ないし二人の委員が担当した。「図案」は「日本画(毛筆画)」「西洋画(鉛筆画)」の試験のなかで行われ、「教授法」は全員で担当した。

「文検図画科」の検定委員の特徴を挙げると、おもに東京美術学校および東京高等師範学校の教員たちであり、美術界においても「文部省展覧会」等官制展覧会では出品者、あるいは審査員として活躍した画家であった。検定委員の所属における科目ごとの特徴は、「日本画(毛筆画)」「用器画」は東京美術学校教員あるいはその関係者、「西洋画(鉛筆画)」は東京高等師範学校の教員たちによって担われていた。

第3章「文検図画科」の試験問題の分析

第3章は試験問題を「日本画(毛筆画)」「西洋画(鉛筆画)」「用器画」「図案」「教授法」の科目ごとに、検定委員と教授要目との関連から分析を行った。

出題と検定委員の関連については、試験問題は委員交代の影響を受けていた。ただし「図案」「教授法」は他の3科目と比べると委員交代による出題の変化の度合いは大きくなかった。

教授要目との関連については、委員や科目によって多少異なる点はあるが、概ね教授要目か

ら大きく逸脱するものではなかったといえる。

総じて試験で求められたことは、ある程度修練された技術とそれに関連する知識、それを生徒に教えることができる力量であり、図画教員として基本的なことであった。しかし、試験は東京美術学校、東京高等師範学校、高等学校程度卒業程度の技術が問われ、その修練には一定の時間をかけた練習を要するため、合格は容易ではなかった。

第4章 受験体験記にみる「文検図画科」の受験者像

第4章では受験体験記をもとに、受験者の属性、志望動機、受験勉強の方法など、受験生の実態を検証した。受験生の修学歴の特徴は、小学校教員検定の出身者が「文検」全体と比較すると多く、なかでも専科の教員免許状取得者が顕著であったことが挙げられる。志望動機は絵を描く経済的、時間的な自由を求める傾向があり、教育への意志や情熱は後景に退いていた。

試験は実技であり、独学だけでは合格が難しかったため、指導者の存在が大きい。「緑陰社」は「文検図画科」受験者のために創設された受験指導機関であり、絶大な人気を博した。「緑陰社」の最大の魅力は、講師が現役の検定委員であったことである。検定委員による指導が日常的に受けられるのは、他の学科目にはない特徴であった。

合格後、「文検図画科」出身の教員は図画教育界において一定の勢力と影響力を持っていた。しかし、中等教員になっても「文検図画科」出身という理由で何かと肩身のせまい思いをすることも強いられたようであった。

第5章 「文検図画科」教員のライフストーリー—武藤完一の場合

第5章は合格者のライフストーリーとして、武藤完一を取り上げた。武藤は大分県師範学校を拠点に活躍した大分県を代表する版画家であったが、「文検図画科」の受験指導者としても著名であった。

武藤は画家から中等教員へ転身した事例である。経済的理由で画家を継続するのが困難となり教員を目指した。武藤は受験指導も積極的であり、個人指導と参考書の出版による形で広範な影響力を及ぼした。勤務先の大分県師範学校の教え子にも「文検図画科」受験を奨励したことで、一部の生徒から反発もあったほど熱心であったが、これは武藤自身の経験に起因したのであろう。

武藤は教育実践と作品制作において、創作版画の教育普及に貢献した。武藤の創作版画の人脈には「文検図画科」教員のネットワークの存在も看取された。

戦後、武藤は「文検図画科」に対して回想を残した。「文検」は自発的な学習による進路開拓が保障されていた点を評価し、学歴だけが問われる戦後の教員養成に疑問を呈した。武藤の指摘は戦後の教員養成の課題に関わるものであった。

終章

終章において、本研究のまとめと今後の課題の検討を行った。

論文審査の結果の要旨

氏名	亀澤 朋恵		
論文題目	「文検図画科」の研究		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	船 寄 俊 雄
	副査	教授	渡 部 昭 男
	副査	准教授	山 下 晃 一
	副査	准教授	吉 永 潤
	副査	教授	小 高 直 樹
要 旨			
<p>「文検」とは、「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」の略称であり、戦前に存在した、所定の学校を経ずに中等教員免許状を取得するための国家検定試験制度である。1885（明治18）年に開始され、途中中断を挟みながら1949（昭和24）年に廃止されるまで60年余りにわたって実施された。受験者総数約26万人という戦前期最大規模の資格試験であり、合格率はおよそ1割弱という難関の試験であった。</p> <p>本論文は、その「文検」のうち図画科（以下、「文検図画科」と略記する）の制度的実態を解明することを課題とし、序章と終章を含め7章から構成されている。序章で、主要な先行研究の詳細な検討を経て研究課題が設定された後、「文検図画科」の各論的考察に入り、制度の概要（第1章）、検定委員（第2章）、試験問題（第3章）、受験者（第4章）、武藤完一のライフヒストリー（第5章）がそれぞれ詳細に明らかにされている。そして最後に終章で論文全体の総括と今後の課題の提示が行われている。</p> <p>「文検図画科」は、「文検」研究のなかでも先行研究が皆無の学科目であり、本論文は本邦初演の研究成果として、全体にわたって独創性に富む価値ある集積となっている。ここでは、上に示した各章の考察を通して明らかにされた創見のうち主要な事柄を3点記しておこう。第1点は、「文検」で求められた図画教員の資質の内実が明らかにされたことである。試験は「日本画（毛筆画）」「西洋画（鉛筆画）」「用器画」の3科目に分けて行われ、時期によってその内容は異なっていたが、総じて言え</p>			

ば、いずれの科目、いずれの時期においても、受験生に求められたことは、絵画と図学の描写手法に精通し、図案、工芸、美術史・美術教育史などに関する知見をもち、それらを生徒に教育する指導力であった。また出題内容は、中等教育の内容を規定する教授要目から逸脱することがなかったことが明らかにされた。出題にあたった検定委員は、東京美術学校および東京高等師範学校の教員で当代一流の作家たちであったから、彼らの専門性に依拠したいわゆる難問・奇問が出題されたのではないかという予想は覆されたことになる。

第2点は、受験体験者の生存が望めない状況であるため、「文検」受験者のための雑誌に掲載された受験体験記を渉猟し、受験者の実態が明らかにされたことである。その内容として重要な事柄を二つ記しておこう。一つは、受験動機が絵を描く自由な時間の確保にあったことが明らかにされたことである。これは、受験動機が経済的・社会的地位の向上と自己修養に収斂することの多い他の学科目と顕著に異なる「文検図画科」の特質であった。いま一つは、「文検図画科」の合格をめざす人々の学習ネットワークが発見されたことである。合格者有志が立ち上げた「緑陰社」は、実戦的受験指導を売りにして人気と影響力を誇ったが、最大の魅力は検定委員が直接指導に当たったことであり、これも他の学科目にはない特色であった。また、合格者有志が立ち上げた「図画文検会」が発行した『美術教育』（1925年～終刊年不明）と、同じく合格者の川村東陽が発行した『図画教育通信』（1911年～終刊年不明）が学位申請者によって発見されたことも特筆に値する。いずれも散逸が激しく、所蔵が断片的にしか判明していないが、「文検図画科」の実態解明には欠かせない史料であり、学位申請者は調査を継続中である。

第3点は、1923年に合格した武藤完一のライフヒストリーが詳細に明らかにされたことである。戦前の教員養成制度下で生きた武藤の意識と行動を描くことによって、法令や制度の変遷の記述に留まりがちな制度史研究の弊に陥ることが回避され、同時に論文の叙述と内容に深み加わることとなった。この点も本論文の卓抜なる達成として特筆に値する。

以上本論文は、「文検図画科」に関するわが国で最初の本格的な研究であり、「文検」研究はもとより、広く日本教育史研究に重要な知見を付与したことに於いて価値ある業績である。

なお学位申請者は、下記のとおり、審査つき学術論文3本を発表しており、博士学位申請の基本的条件を満たしている。

- ・「『文検図画科』の研究（第1報）— 試験日程と受験者統計」『神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要』第5巻第2号、2012年、105～117頁。
- ・「『文検図画科』の研究（第2報）— 『西洋画（鉛筆画）』検定委員」『神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要』第7巻第1号、2013年、95～110頁。
- ・「『文検図画科』教員のライフヒストリー— 武藤完一の場合」日本教育史研究会編『日本教育史研究』第32号、2013年、71～94頁。

よって本審査委員会は、学位申請者の亀澤朋恵が博士（教育学）の学位を得る資格があると認めるものである。